

日本声楽発声学会

学会通信 第 48 号

2022 年 10 月発行

会員の皆さまへ

会長 川上勝功

『学会通信第 48 号』をお届けいたします。本来ならば今号は、9 月に発行を予定しておりましたが、新型コロナウイルスの蔓延により、3 年間の空白を経てしまいまして、今夏 8 月末に、学会の恒例行事でありました夏季研修会が、ようやく開催に漕ぎ着けることが出来たことと、他の諸々の内部事情が重なってしまいましたことで大きく遅れをとってしまいました。誌面をお借りいたしまして、会員の皆さまには心からお詫び申し上げます。研修会当日は、観客動員につきましては、まだコロナの影響が続いておりました事情から、3 年前の数字の約半分という結果に終わってしまいました。しかし、講座の中身が非常に充実しており、遠方より足を運んで下さった会員、臨時会員の皆さま方の評判もたいへん宜しかったとのことでしたので、赤字は出てしまいましたが、まず開催してみて正解であったのかなと自負いたしているところです。

詳細のご報告につきましては、次号の『学会誌』に掲載することになっておりますし、今回の学会通信には簡単なご報告を記載いたしました。

加えまして、今回は会員の皆さまの参加が思わしくないであろうことを見越して、プロの録音・録画の技術者をお願いいたし

ました。現在まだ編集中ですが、11 月初め頃には皆さまのお手元に配信できるものと思います。詳細につきましては後述してありますのでご覧ください。

さて、前号（3 月号）では、富山大学教授の千田恭子、富山大学名誉教授の森田信一共著による『わが国における洋楽導入と声楽の専門技術習得の過程』を掲載させていただきました。これらの明治以降の、ほぼ完璧に近い理想的な日本の音楽の歴史につきましては、声楽の勉強を本分としてきた人々にとりましては、私も含めまして、当然知りたいと言う気持ちは重々ありながら、なかなかその機会に接することがないままに過ぎてしまったというのが現実でしょうか。

お二人が書かれた論文によりまして、明治からのその歴史が手に取るように理解でき、空白を一気に埋めることが出来たのは私だけではないように思います。事実、この記事に対する評価は非常に高いものがあり、多くの方々に喜んでいただけたようです。

当学会が立ち上がってから、かれこれ 58 年もの歳月が流れたことで、2 年後には 60 年史を発刊出来たらと考えております。もちろん、正式に理事会を経て総会で皆さまのご賛同を得ねばならないことは十分に承知いたしております。20 年前に 40 年史を発行し、次は 50 年史をとの声もありました

が、いろいろと不幸な事件に見舞われ、とうとう実現できないまま今日に至ってしまいました。

そこで今回は、当時の様子を探るために40年史を発刊した時の故米山元理事長の「発刊に寄せて」の挨拶文と、故柴田睦陸2代目理事長の「学会誌第一号発刊を祝して」の記事を拝借させていただくことといたしました。特に柴田先生の執筆された文章からは「学会」が発足して間も無い頃のことでありましたので、先生ご自身の赤裸々な思いが熱く述べられておりまして素直に感動を覚えました。

ともすれば、新しいウイルスとの戦いや、人間の心の醜さを曝け出したような戦争のニュースに日々心を奪われ、我々にとって最も大切な「学会」に於ける本文が忘れ去られてしまうのではないかと心配いたしております。いつの日か明るい世界が戻ってくることを信じてつも、現実には厳しく辛いです。皆さまもどうぞご自愛下さいませようお祈りさせていただきます。

学会誌第一号発刊を祝して 柴田 睦陸

昭和39年10月、城多又兵衛先生（初代理事長）と現理事須永義雄博士の発意に基づき、その後私も発起人の一人に加えさせて頂いて発足した「声楽指導法研究会」は、昭和46年度の総会に於て「日本声楽発声学会」と改称され、音楽界全般に新風を送る、独創的、且つ行動的な「学会」として、その動向が注目されるところとなりました。

会員は九州より北海道まで全国にわたり、総会、研究会、講習会等の各種会合に多数参加されて研鑽を続けて参りました。

その間、長野県支部・山口県支部・中国支部が設立され、それぞれの地域に適した研究活動が展開されてきたことは同慶の至りに存じます。

支部活動は、学会の性格から考えても重要な基本目標の一つであると考えていますが、ようやく各地に設立の動きが見え始め、学会の充実が予測されることは力強い限りであると言えます。

さて今回、学会誌第一号の創刊の運びになり、会員相互の為の大動脈が動き始めたことは、記念すべき慶事として、皆様と共にその発展と充実を期待したいと思います。

此の機会に、2、3の所信を述べて、皆様のご批判を頂きたいと思ひます。昭和39年の設立趣意書にも、「衆知を集め、時間をかけて鋭意研究を進める」とありますが、根強い楽壇の因習の中で活動が続けることがいかに時間を要することであるかを痛感させられることでした。

現在までの学会の実績は、主に「フスラー教授」の理論解明に終始したといえるでしょう。しかもその内容は、須永先生のご労作に依存し、私共音楽家側は、フスラー教授の卓越した指導理念と、科学的基盤に立脚した発声機構の解明にただ驚異の眼を持って聞き入っていたに過ぎなかったと言えます。

発起人であり理事である須永博士の献身的なご努力は、全く特筆に値すると言ってもなお言葉が足りない気がしています。学会の今日は、須永博士の熱意とその影響に依るものであることは、全員の認めるところであります。私は、学会理事長としてだけでなく、声楽家、声楽教師の一人として、心からの感謝の意を表明したいと思います。

私が今誌面を割いて、ここに須永博士の賞賛に触れることは、博士にとって本意ないわごと反対されると思うのですが、あえて一言触れさせていただきます。頑強とは言えないお身体を無理しながら、多額な個人的出費も口にされず、ひたすら学会の発展、声楽学習の正常な軌道の創造の為に努力されている姿を、私は易々として黙過しなければならぬふがいなさを感じます。黙過せず、正当に研修を分担して積極的に仕事をすれば良いのですが、内容的にも時間的にも、博士の主張に追従することで精一杯であるという現実を否定することが出来ないのです。

くどいようですが、須永博士にとって「声楽発声」は、ご自身の発言にもあるように、サイドの仕事です。「発声」を職業とする私共の相談相手になっていただく立場にある人が、逆に専門家を叱咤激励しなければならず、しかもなお、博士の期待からは遥かに遠い地点で溜息をついているのが、偽らない私共の現状です。

私は私達の無能を告白するためにこの文を書いているではありません。無能は自覚することによってのみ、償いの方法を探ることができるのだと信じると同時に、私を含めて楽壇人の多くは、ややもすると近視眼的に主体を忘れ、なすべき責任の所在を平気で間違える人間的な弱さを思い、改めて自身への轍としたい一念からなのです。

百年を迎える我が国の声楽の歴史は、太平洋戦争後一応声楽の形態が取れるようになり、ある意味では他の分野にも劣らぬ発展を遂げたと言えなくはないでしょうが、外見の華々しさに比し、その内容は必ずしも樂觀出来る状態ではないように思われるのです。声楽教師の横の連絡は皆無に等し

く、演奏も、大学（音楽系）もまた、明治のボディに大正のエンジンを乗せて走っている車のように、真っ黒い排気ガスに覆われながら、スピードも出ないし乗り心地も悪く故障ばかり、という気がするのです。

わが国古来の邦楽界などにおける家元制度にはそれなりに伝統の試練を経た多くの美点があるように思われますが、声楽界のそれは、個人の体験以外頼るものがないために、本質とは何の関わりも無い地位や名声に便乗することしか考えず、従ってメトロの隠蓑を張り巡らしたお山の大將（家元）が安易に出来上がるのです。

こうした背景のもとに、大学の教育が行われたとするならば、それは恐ろしいことであるばかりでなく、一刻の猶予も待たず改革がなされなければならないことだと思います。

私は明治のボディと申しましたが、しかしこのボディは、設計も材料も工作も立派だったと尊敬しています。今日の日本の音楽を創り上げた基は明治にあったことを痛感しています。かつて明治36年、藝大の前身である東京音楽学校において試演されたオペラ「オルフォイス」は、当時としてはまさに画期的な企てであると共に、その影響は、三浦環女史を始めとする多くの有能な人材を世に送り出しているのです。

わが国の土壤に、西欧の「声楽」を移植することが、どのように大変なことであったかは、想像に余りあるものがありますが、それは、十分生かされて受け継がれてはいませんでした。どういういきさつがあったのかは知る由もありませんが明治後期より、大正、昭和にかけての50年間（歴史の約半世紀）は、声楽はリート歌曲に偏し、「いやしくも官立の教官、学生たるもの、舞台にお

ける扮装、演技はまかりならん！」という厳しい「お達示」も含まれて、声楽にとっては取り返しのつかない暗黒時代を体験することとなったのです。

暗黒時代は、何もひとり声楽界だけの問題ではありますまいが、舞台芸術に対するわが国民の伝統的偏見に便乗したものであっただけに、声楽の暗黒時代は遥かに長く、遥かに根強いものがあったように思われます。

そうした環境にもかかわらず、特殊な人々の冒険と開拓の精神が消えることなく育まれて、わが国の声楽が、今日、欧米レベルにも決して劣らぬものに育て上げられたことにほのぼのとした夜明けの喜びを感じるのです。

いささか口はばった言い方かも知れませんが私は、藝大を初めとする音楽系大学、或いはそれに類する教育機関の音楽教師は、音楽家として、大学教師として相応しいというより、教育者を誇りとし、芸術を志向するものに恥じない各自の理念を再確認し、声楽の本質を踏まえた教育のあり方について考えなければならない「限界の時」を迎えていることを強調したいのです。

こうした時、わが学会が果たすべき役割が、どんなに重大かは、自ずから推察出来ることだと言えましょう。

声楽の中に含まれる「発声」の部分は不特定であって、もとより発声のみで声楽全般を考えることは出来ません。しかし、部分であるかも知れない「発声」は、声楽の基本部分を占めると共に或る時は、芸術性の決定的部分にさえ関与する、多分に流動的な性格を持っている部分と言えましょう。或る時は、発声は完全に無視されて無きに等しいような「歌」があるかと思えば、或いは

「歌」の前面に発声技術の枠ともいうべき部分が拡がり「発声」即「歌」の感を抱かせる声楽もあります。勿論、どちらが良いか悪いかを言っているのではなく、「声楽」、「発声」の持つ性格の多面性について言っているに過ぎないのです。

このように複雑な性格を持つ発声は、前にも触れたように、その複雑性の故に、各人、各様の見解を成立させ、素人と専門家の区別をなくし、そしてそれらは連鎖的に排他的・閉鎖的・独善的な傾向に陥れる危険を持っているのだと言えましょう。

現在、わが国における声楽教師の大部分は、発声からソルフェージュ・歌曲・アリア等、声楽全般を全部まとめて指導する教師だと言えましょう。

ごく最近、ヴォイス・トレーナー即ち、発声専門の教師が誕生しかかっていますが、将来は、各部門に分かれて専門の教師が、それぞれの高度な技術に依って各々が分担して教育することになると思われますが、大切なことは、その時点でも、教師は声楽全般の知識を持った上での専門を持つものでなければならないことを忘れてはならないと思います。

現代のように、高度な技術と深奥を極める内容の要求される声楽の教師が、八百屋か、荒物屋のように何でも屋で済まされる道理がありません。

私達の学会は、真実について語り合う者の集まりでなければなりません。地位や、名声、派閥から生まれる全ての偽りを否定し、赤裸々な学究者となって、お互いを高めていく者でありたいと思います。

発声が、発音と共に声楽の研究には避けることの出来ない重要な基礎技術であることを否定する者はありません。絶対であり、

広範な部分を持ちしかも独学による研究が如何に困難なものであるかを知らないはずのない多くの教師達が、何故、語り合い、助け合おうとしないのでしょうか？それが重要であればあるほど、教師達はお互いに接触することをためらい、まるで「貴方の欠点について触れないから私のことについても何も言うな！」とでも言うような暗黙の諒解が出来ているかのように、同僚の集まりにも決まって討論を避け、意識的に低級な世間話にお茶を濁そうとする逃避的傾向を感じるのは、私一人なののでしょうか。確かに、同僚との討論に依って、不和感を起こすことのためらいがあることは理解出来ますが、だからと言って、お互いに「臭いものには蓋」の風潮を是認することは無責任にすぎはしないでしょうか。

私は、学会が、やがて発声に関連を持つものとして、基本である発声の他に、発音、各国歌曲、オラトリオ、オペラの各専門部会を持ち、各大学間の交流はもとより、大学と高校から、小学校、或いは職場合唱団、プロ合唱団の指揮者、出来得れば独唱者達との交流も活発になされるべきだと考えます。しかし、そのためには、もっともっと多くの有能な人々が1年に何回かの研究会、講習会に進んで参加されるような雰囲気になければならないと思います。

「発声学会なんて、あの連中にやらしておけば良い。参加したって何が何やら見当もつかない。自分には自分のやり方があるのだし、それで立派に生徒の教育は出来ている」と言うのが、私達学会を白眼視する人々の一般的な態度だと思いますが、1年に1回でも2回でも良い、日本中の声楽の教師や教育に関心を持つ声楽家達が一堂に集まり、自分たちの失敗経験、成功と疑問について

語り合い、励まし合う場を持つことが出来たらどんなに素晴らしいことでしょう。

ちょうど、登山隊のパーティが、お互いに励まし合いながら苦難に堪え、遭難しかかった他のパーティを命懸けで救助しながら、そのパーティと頂上を競う姿。そしてそのパーティ達は、やがて平服にかえった後、成功を話し合い、苦しかった日々を楽しく語り合う姿。

私は、私たちの声楽界にそうした日の訪れることを信じたい。もしそれらの願いが全て空虚な像でしかないとしたら、声楽家からも声楽教師からも身を引きたいと願うのは私一人ではないでしょう。

大部分の人が、そうありたいと願っていることが何故出来ないのでしょうか。私はこの悲願達成のために、皆様と一緒に、出来得る限りの努力を続けたいと思います。

学会の会員の方々にお願いしたいのは、最初的手段として、一人でも多くの会員が例会に参加出来るよう、ご自分の周囲に呼びかけてほしいと言うことです。そして学会の存在を知ってもらい、知識と体験をより多くの人々に分かち合いたいと願うものであります。

学会の理念と行動は、世界に先駆けてユニークなものを持っていると確信しています。

重大な帰路にあると言われるわが国に声楽界のために互いに手を握り合いユニークな基礎集団となって、その発展の土台となるうではありませんか。

私は心からそれを念願しています。

昭和 47 (1972) 年 5 月発行
「日本声楽発声学会誌」第 1 号より

以上が、柴田先生がお書きになられた全

文です。私が勝手に太字にしたり、太線を引いたりしましたので「読みにくい！」と仰られる方もおられるでしょうが、どうしても柴田先生の熱意を皆さまにお伝えしたいと思い敢えてそうさせていただきました。

まず、「発声指導法研究会」が立ち上げられたのが、私が藝大生になる2年前位のことでした。私は高校生の頃から「発声法」につきましては大いに興味を持っておりました。

何故なら最初に師事した高校の音楽教師（藝大の師範科出の先生）によって、声帯にトラブルを負ってしまっていたからです。その後は、当時藝大におられた高名な教授に師事したりしまして、手術はせずに徐々に回復はして行きましたが、「発声法」つまり声の訓練法につきましては良く理解出来ないままに過ごしておりました。

大学に入り「日本声楽発声学会」の存在を知り、勉強会等に足を運ぶようになりました。当時は受付のアルバイトなどを経験させられたのをかすかに記憶いたしております。

そんなことで、私は幸運なことに藝大生であった時期に「発声学会」と出会うことが出来（まだ会員にはなっていなかった）、発声の勉強のスタートを切ることとなったわけです。その後は、前に掲げた柴田先生の文章の通り、そのものズバリの、あたかも戦場にいるかの如きの、「学会」を見るチャンスに遭遇していったわけです。正に真剣でした。

私達藝大音楽科の音声生理学の先生でおられた須永義雄先生の「フスラーの発声理論」を中心に、柴田先生とのコンビで会は進められておられたようでした。須永先生からの激しく、時としては度を越えた厳しい

言葉に、何度かトラブルもありましたが、柴田先生が何とか治めておられたのは良く記憶しております。

ただ時が経つうちに、須永先生の激しさも薄れていき、その後は、柴田先生が赤裸々に述べておられましたように、「学会」の本人から大きく外れ、地位や名声を求める方達の戦いが露骨になっていったのも、偽りない、何とも悲しい事実としてありました。そしてそれは、60周年を迎えようとしている今現在でも、隠然として残っているのも事実です。何ともバカげた話に聞こえることと思いますが、厳然と存在しているのです。

しかし、私たちはそんな事に屈してはいられません。この十数年の間の科学の進歩は目覚ましいものがあります。柴田先生や米山先生が導いて下さった「学会」の精神は、今、また私を含めた会員の皆さま方と一緒に、認識を新たにすること、この困難な時代を乗り切って行きたいと強く感じております。

私の会長としてのお役目は残りわずかとなりましたが、執行部、そして理事の皆さんと共に頑張って参るつもりですので、どうぞ宜しくお導き下さいますようお願い申し上げます。

「発刊に寄せて」の巻頭言についての所感

日本声楽発声学会 40 年史の発刊を発案されたのは当時の学会理事長でいらした故・米山文明先生で、曰く、諸先輩が築いてきた長い伝統と実績を重ねた学会であるので、40 年の節目を迎えたことで、この記念誌制作を思ったとあります。

また、今のうちに 40 年史を作っておかな

いと、将来益々まとめることが難しくなるであろうと考えた、とも述べておられます。

米山先生ご自身は途中から「学会」に入会されたので、発足当初のことはほとんどご存じなかったそうです。しかし、本学会の現旧役員（約20年位前）の先生方や会員の方の中に当時の状況を詳しくご記憶の方々が現れた事と、またその頃（学会発足の頃）の資料を保存されていて、提供して下さった方もおられたとのことでした。

私（川上）は、当時、学会の事務局長を拝命しており、編集には直接関与してこなかったもので、当時の編集作業に関することはあまり記憶にないというのが正直なところでした。

次に書かれてあることが、米山先生が仰りたかった一番大切な部分であると思いますので、敢えて原文のまま掲載させていただくことといたします。

日本の声楽発声は如何にあるべきかと言う発声の基本的解明がまず必要です。それについて現状は、日本語の正しい発語法、標準となるべき発声法そのもののメソッドの体系付けが確立されているとは思えません。この基礎的研究こそが本学会のやるべきことの一つです。

次にその方式を声楽を志す若者たちに如何に教えて行くべきかと言う教育体系が必要になります。そして成人した声楽家達が歌の表現者として音楽芸術の表現方法を追求すると言う面もあります。

本学会がそれらのいずれの立場を追求するにしても学会に貢献することは可能です。

私（米山）は本学会をさらに発展させるためには、会員一人ひとりの方々がいずれかの立場から研究発表を活発にされること、

新しい学会員を益々増やしていくことが、私達現会員に課せられた大きな命題だと考えています。

本史発行を機会に、私達会員全員でこの40年のチェックポイントで一度立ち止まって考えてみましょう。

そして本学会の過去、現行体制の反省と、将来への展望（発声教育の育成、演奏体系の整備、理論研究の発展）などに役立てるための参考にしてみたいかがでしょう。

以上が、故米山文明元理事長が40年史の発刊にあたり述べておられるところの全ての文章です。私も何度も読み返してみましたが、20年前に米山先生ご自身がお考えになっておられたことと、今の私達が思っていること、心に留めていることと寸分の違いもないのではないかと思います。米山先生がご高齢で理事長を退かれた後、当学会は大きな不運に見舞われてしまいました。その不運は長く尾を引くことになってしまいました。永井和子前会長を中心とした理事の方々のご努力により、ようやく学会は立ち直ることが出来たのです。そして私（川上）が会長になりましてからは、ほんの暫くの間は何事もなく平穏な日々が続いていたのですが、半年余りで、前代未聞の新型コロナウイルスの蔓延による世界的なパンデミックに日本も巻き込まれてしまいました。この3年余りは何も活動することが出来なくなってしまったわけです。それにつきましては皆さま方がよくご存知のことと思います。

今号では、故柴田先生と故米山先生のお書きになられた文章に絞って特集をさせていただきますが、次回3月号は、私にとりましても最後の仕事のひとつとなります。

予定といたしましては、今号にご紹介しきれなかった 40 年史記念号から、前記お二人以外の方々と、「学会」の草創期に日本の声楽発声の研究に多大な貢献をされ、情熱の炎を燃やし続けてこられた先輩方の貴重な想いの丈を特集させていただく予定です。何故、今、これらの記事を特集するかにつきましては、新入会員となられたお若い皆さまは、発声学会のほぼ 60 年に亘る歴史については殆どの方がご存知ないものと思われましますし、会の歴史と共に年輪を重ねて来られたご年輩の方々の中にも、記憶が薄れてしまったと仰る方もおられるやと思い、敢えて勇気を持って書かせていただきました。失礼なことを申し述べているかもしれませんが、どうぞ皆さまのご寛容のお心に照らされまして、何卒ご容赦下さいますよう心からお願い申し上げます。

報告◆COVID-19 流行下の ICVT2022

理事 森井佳子

2022 年 8 月 3 日～8 月 6 日までオーストリアのウィーン国立音楽大学にて開催された第 10 回 ICVT (International Congress of Voice Teachers 国際声楽指導者会議) に参加した。その概要と研修内容については来たる 11 月 27 日に予定されている例会や『声楽発声研究』の書面においてお伝えするつもりである。今回は COVID-19 の影響で開催が 1 年延期になった上に、ウイルスは変異し続け終息する兆しも見えず、国際間の渡航制限があっただけでなく、ロシアによるウクライナへの軍事侵攻という国際問題までも発生した。そのため筆者自身も参加の見通しが立たず、学会通信第 47

号やホームページ等を通して ICVT への参加を呼びかけることができなかったことは大変遺憾である。3 月末までの Early Bird 割引も見送り、5 月末の最終締め切り日の申し込み後も本当に渡航できるのか、出発直前までの 2 ヶ月間心中穏やかではなかった。出発前には手厚い保障の海外旅行保険に加入するとともにエンディングノートを更新した。常に最新かつ正確な情報を得るために外務省、厚生労働省、オーストリア大使館、在オーストリア日本大使館、ICVT のウェブサイトや渡航 1 ヶ月前から復路の飛行機に搭乗するまでは毎日、多い時で 1 日 3、4 回はチェックしていた。

大会の参加申し込みをはじめ、宿泊先、航空券、旅行保険、そして今回はワクチン 3 回分の接種証明書、空港検疫所での手続きに必要な My SOS というアプリ、現地で受ける PCR 検査場の予約から陰性証明書の手配・決済を全てインターネット上で行った。今回最も新鮮だったのは、詳細なプログラムがスマートフォンのアプリになっていたことである。前回までは A5 サイズ厚さ 1 cm 弱の冊子に詳細なプログラムとスケジュール、講演者情報、マスタークラスの受講者情報、参加者名簿が記載されていた。それぞれの講習会での資料も QR コードやメーリングリスト登録によって入手する仕組みになっており、ペーパーレス化が進んでいた。講習会で歌う生徒の中にもタブレットを使用する者もいた。また、キャッシュレス化が進んでおり、ケルントナー通りにあった在奥日本大使館推奨の PCR 検査場はクレジットカード決済のみであった。8 月時点で、EU 内ではマスク着用者はごく少数。公共の乗り物内で FFP2 マスク着用が義務付けられていたの

で、早速購入、装着後トラムに乗り、市庁舎の中庭で行われたパーティに備えたが、そこではコロナ以前の世界にタイムスリップしたかのような、マスク無し、握手、ハグ、至近距離での「口角泡を飛ばす会話 in English」が繰り広げられていた。郷に入れば郷に従えて、COVID-19 感染の要素しかないような4日間を過ごしたが、復路便出発72時間前に受けたPCR検査は陰性で、無事に帰国できたことは奇跡であった。ただし、出発前から筆者は車の自損事故、コーヒーマシン破損、ワイングラスの破損、スーツケースの破損といった「厄落とし」を行っており、無事の帰還は厄落としのお蔭かもしれない。



写真上左：シュテファン大聖堂にウクライナ国旗の色でSTOP WARのメッセージ

写真上右：会場にて（筆者）



代表者会議（2列目左から7人目が筆者）

◆夏期研修会報告

◎A 講座「中学生の歌唱指導 現状と課題&展望」報告 文責：竹田数章

A 講座は、「中学生の歌唱指導 現状と課題&展望」という演題で、府中第四中学校音楽科教諭の横田順子先生にご講演いただきました。横田先生は狛江第四中学校やいくつかの学校を経て、現在府中第四中学校合唱部の顧問として指導されています。その合唱部はNHK 全国学校音楽コンクール全国大会、全日本合唱コンクール全国大会などで金賞や文部科学大臣賞を受賞されています。長年、歌唱・合唱指導に携わってこられ、当日は、府中第四中学校の生徒達も参加されました。



講演では、多感な時期である中学生と関わることの大変さを訴えておられました。生徒との関りの中で、集団の中で育てる方が伸びる児童、個人的に関りを深めた方が伸びる児童などの見極めが必要と述べておられました。また、環境を整えて、音楽の授業では、言葉を上手に使う、各生徒が具体的にどう練習すればよいのかを丁寧に説明することを実践されていることを、ビデオを通して示されました。またご自分がピアノ科出身であるにもかかわらず、声楽の指導ができるのは、声楽の伴奏者として、東敦子先生をはじめとする先生方の指

導法を聴くことができたことを述べておられました。次に、変声期を迎えた児童の歌唱が4年でどう変わったのかをビデオで説明されました。各人がどう歌いたいのかを尊重される指導法をなさっておられることがわかりました。生徒達への歌曲指導として、まず個人レッスンが行われました。生徒は個々に自分の歌いたい曲を用意し、横田先生は、きめ細かく指導されていました。児童も心を開いて指導を受けているのが伝わってくるレッスンでした。最後に生徒達全員によるデュブラ作曲「アヴェマリアより、Ⅱ」の合唱が行われ、美しい旋律と歌声が深く心に残る演奏で講演は締めくくられました。



横田順子先生

◎B 講座「現代日本の作曲家シリーズ 講座 X」報告 文責：佐々木 正利

B 講座は「ことばと向き合う」という演題で、なかにし あかね先生にご講演いただきました。テノール歌手辻裕久氏となかにし先生ご自身のピアノ伴奏での実演を交え充実したご講演でした。その内容は以下の通りです。

ことばを声に乗せて歌う声楽作品を作るにあたっての言葉との向き合い方について、「言葉を歌うことは文化を歌うことである」という側面から、実例と共に多角的なアプ

ローチを紹介し、持論を展開された。

講演は、まず以下の項目を提示し、続いてそれに則った形で実例（実演・音源）をもとに詳説された。

(1) 言語による音楽スタイルへのアプローチ

- ・言語は文化的背景を内包している

- ・言葉は変化し続ける

⇒その言語特有のリズム感がメロディーラインにどのように乗るか

(2) 文化を歌うことへのアプローチ

⇒その文化の特性を知るための友好的な方法のひとつとして、比較対象を持つ

以下、その具体を示す。

実演 1：

♪ Beautiful Dreamer

スティーヴン・フォスター作詞・作曲

(英語)

♪ 夢路より 津川主一 日本語詞

(日本語)

日英の言語スタイルによる違いを感じる。

実演 2：

♪ ひぐらし 團伊玖磨作曲 北山冬一郎

作詞(日本語) ドロシー・G.ブリトン英語詩(英語)

作曲者自身が「世界で広く歌われる」ことを意図し、美しい英語訳がつけられた例。

実演 3：

♪ 歌曲集『希望の小鳥』より「夏」

なかにしあかね作曲

エミリー・ディキンソン原詩

なかにしあかね日本語詞

偉大な詩人はその作品群そのものが豊かな文化である例。



テノールの辻裕久氏

音源 1:

♪混声合唱曲集『四季の翼』より「秋に」
なかにしあかね作曲
ジョン・キーツ原詩例。
なかにしあかね日本語詞

キーツという詩人の文化の中にある「秋」、風景画の奥にある、冬の前のひとときの樂園、実りの充足を歌う音で表現したいと考えた作品。

音源 2:

♪同声 3 部合唱とピアノのための『バベルの塔』 なかにしあかね作詞作曲

特に子供達に歌ってもらうテキストを選ぶ際に、美しい詩の世界に触れたり、想像を豊かに膨らませたり、文化や歴史に触れてこの世界に関心を深めるきっかけとなるような時間を過ごしてもらいたいと願った作品。

音源 3~6:

♪歌曲集『二番目に言いたいこと』&女声合唱組曲『今日もひとつ』より
「秋のあじさい」 星野富弘作詩
なかにしあかね作曲「演奏者の持つ背景や文化の力も大きい」ことを示すための様々

な演奏者による演奏の聴き比べ。

音源 3 20 代~30 代の若手プロ、セミプロのアンサンブルによる演奏

音源 4 平均年齢 80 歳以上の女声合唱団による深みのある演奏

音源 5 40~50 代主婦層を中心とした女声合唱団によるエネルギーに満ちた演奏

音源 6 なかにしが個人的に敬愛していたソプラノ歌手による演奏

まとめとして、「言葉を歌うことは文化を歌うこと」という豊かなテーマを「言語による音楽スタイル」、「文化を歌う」の二方向からスタートして様々なアプローチを示したが、これらのアプローチによって、演奏者自身が何を感じ、何を表現するかを考えるきっかけとして頂けたら幸いである、と結ばれた。



なかにしあかね先生

◎C 講座「耳に聞こえない高周波が音楽の感動を高める」報告 文責：竹田数章

C 講座は、「耳に聞こえない高周波が音楽の感動を高める」という演題で、国立精神・神経医療研究センター 神経研究所 疾病研究第七部 部長の本田学先生にご講演いただきました。

音は空気の振動ですが、その振動数が 1 秒あたり 2 万回（すなわち周波数 20kHz）を超えると、人間の耳ではもはや音として感じることはできません。それにもかかわ

らず、20kHz を遙かに超えた高い周波数成分(超高周波)は、明らかに美しく快く感動的に感じられます。それはどういう訳なのか、それを解明された「耳に聞こえない高周波が音楽の感動を高める現象＝ハイパーソニック・エフェクト」について詳しくお話してくださいました。

なぜ、耳に聞こえない超高周波が音楽の感動を高めるのか？実は、超高周波を豊富に含んだ音を聴いている時には、同じ音源から超高周波だけを取り除いた音を聴いている時と比較して、脳の快感中枢が強く活性化されることが脳イメージング研究により明らかになったことを示してくださいました。学生時代、芸能山城組と出会い、ガムランの演奏などをされていたエピソードから、このような研究につながってこられたことをお話してくださいました。

こうした超高周波は、自然界にも、楽器音にも、また発声法によっては、人間の歌声にも豊富に含まれることがわかってきているとのことでした。超高周波が脳の活動を介して音楽の魅力を高める効果「ハイパーソニック・エフェクト」について、脳科学の切り口から詳しく解説してくださり、応用として疾患や生活にも効果が得られることなど、大変興味深い内容でありました。



本田学先生

◎「歌の集い」報告

文責：齊藤祐

2022年8月23日(火)13:00より日本福音ルーテル東京教会「礼拝堂」にて、第14回日本声楽発声学会主催「歌の集い」が、夏季研修会の2日目の「D 講座」として開催されました。

新型コロナ感染拡大を受けて、実施に当たっては入口での消毒や検温、マスクの着用の確認はもとより、収容人数を制限し、客席間および舞台と客席の間隔を十分にするほか、休憩時間も換気を実施するなど、最大限の感染予防対策が取られました。日本声楽発声学会員より4名の会員によって以下の順で研究発表は行われました。

1. 藤原 優香 (Sop.) Pf.安野 美咲
・〈クリスマスツリー〉 Christbaum・〈マリアの歌〉 Marienlied
・〈あなたに愛がふれたなら〉 Hat dich die Liebe berührt 作曲：J. Marx (以上3曲)
・オペラ《夢遊病の女》より〈ああ！信じられない〉 Ah! non credea mirarti
作曲：V. Bellini



2. 岩間 明日香 (Sop.) Pf.塚本 雅子
・モテット 〈踊れ、喜べ、幸いなる魂よ〉

Motette 《Exsultate, jubilate》 K.165

作曲：W.A.Mozart

・〈ヴォカリーズ〉 Vocalise

作曲：S.Rachmaninov



3. 清水 順子 (Sop.) Pf.林川 崇

・オペラ 《ジャンニスキッキ》より 〈私のお父さん〉 O mio babbino

作曲：G.Puccini

・オペラ 《ポーギーとベス》より 〈サマータイム〉 Summertime

作曲：G.Gershwin

・「落葉松」 作詞：野上 彰

作曲：小林秀雄



4. 高木 照子 (Sop.) Pf.小田切 舞美

・〈アルプスの羊飼いの少女〉 La pastorella delle alpi

作曲：G.Rossini

・〈バッラータ〉 Ballata

作曲：O.Respighi

・オペラ 《シャモニーのリンダ》より 〈この心の光に〉 O luce di quest'anima

作曲：G.Donizetti

・「さくら横ちょう」

作詞：加藤周一 作曲：別宮貞雄



なお、各演奏発表の終了後には、司会者から発表者へインタビューのコーナーを設け、①今後の研究計画 ②レパートリーの拡大 ③感情表現の工夫 ④歌唱演奏における異なる言語の発音について その他については学会よりネット配信予定の「D 講座録画」をご覧ください。



「歌の集い」司会の齊藤副会長



総合司会の佐々木副会長

◆夏季研修会の講座配信のお知らせ

上記報告にある通り、3年ぶりに対面式で行われた夏季研修会は、A～D 講座とも大変充実したものとなりました。さすがに例年より出席者は少なかったものの、参集された会員の多くは、とても素晴らしい講座ばかりで、開催できたことに感謝するとの感想を述べられました。この夏季研修会の記録は、先の理事会で、出席したくても出られなかった会員のために録画配信を行うことが承認され、専門業者に依頼して収録したところです。

この録画を以下の方法で会員の皆様に配信いたします。希望される方はお申し込みください。

◎配信方法は、事務局より vimeo で配信することとし、希望者には動画の URL とパスワードをお知らせする。

◎視聴料金は、当日の参加者は 4 講座合計で 6,800 円を支払っていることから、この金額を基に以下の通りとする。

A～C 講座と D 講座（歌の集い）を別枠とし、A～C 講座全体を 1 セットとして 5,000 円とする。また D 講座は 2,000 円とする。ただし特例として、以下の 4 つを認める。

- ・既に夏季研修会の申込みをして当日参加された方は無料。
- ・申込みをしたが当日参加できなかった方も無料。
- ・講師の先生方はご自身の講座のみ無料。
- ・D 講座ご出演の 4 名の方々は D 講座のみ無料。
- ・顧問、相談役、名誉会員の方々は無料（講習会参加費が無料に合わせて）。

◎配信期間は、11 月に準備が出来次第配信を開始し、1 月 31 日までを視聴期間とする。

* 配信視聴後記

執行部としては、経費がかなり嵩みましたが、出来上がり具合を心配していましたが、想像以上に画質、音質とも最良で、プロに依頼して本当によかったといった感想を持ちました。今後の検討次第ですが、11 月例会での小林道夫先生の講座と大西宇宙（たかおき）さんの歌とお話も、同様に録画配信ができればと考えております。

◆執行部会、理事会開催記録（2022 年 3 月以降）執行部会開催記録

●2021 年度第 10 回執行部会議

招集形態：Zoom によるオンライン

開催日時：2022 年(令和 4 年)3 月 14 日(月)

19 時 00 分～21 時 00 分

出席者：川上、齊藤、森井、竹田、佐々木

●2021 年度第 11 回執行部会議

招集形態：Zoom によるオンライン

開催日時：2022 年(令和 4 年)4 月 11 日(月)

18 時 00 分～19 時 30 分

出席者：川上、齊藤、佐々木

●2021 年度第 12 回執行部会議

招集形態：Zoom によるオンライン
開催日時：2022 年(令和 4 年)4 月 12 日(火)
15 時 00 分～16 時 00 分
出席者：川上、齊藤、佐々木

●2021 年度第 13 回執行部会議

招集形態：Zoom によるオンライン
開催日時：2022 年(令和 4 年)4 月 22 日(金)
19 時 00 分～21 時 00 分
出席者：川上、齊藤、森井、佐々木

●2021 年度第 14 回執行部会議

招集形態：Zoom によるオンライン
開催日時：2022 年(令和 4 年)4 月 25 日(月)
18 時 00 分～19 時 30 分
出席者：川上、齊藤、森井、佐々木

●2021 年度第 15 回執行部会議

招集形態：Zoom によるオンライン
開催日時：2022 年(令和 4 年)5 月 5 日(木)
18 時 00 分～19 時 00 分
出席者：川上、齊藤、森井、佐々木

●2021 年度第 16 回執行部会議

招集形態：Zoom によるオンライン
開催日時：2022 年(令和 4 年)5 月 30 日(月)
19 時 00 分～21 時 10 分
出席者：川上、齊藤、森井、竹田、佐々木

●2022 年度第 1 回執行部会議

招集形態：Zoom によるオンライン
開催日時：2022 年(令和 4 年)6 月 13 日(月)
18 時 00 分～20 時 00 分
出席者：川上、齊藤、佐々木

●2022 年度第 2 回執行部会議

招集形態：Zoom によるオンライン

開催日時：2022 年(令和 4 年)9 月 25 日(月)
18 時 00 分～20 時 10 分
出席者：川上、齊藤、森井、竹田、佐々木

理事会開催記録

●2021 年度第 6 回理事会議

招集形態：Zoom によるオンライン
開催日時：2022 年(令和 4 年)4 月 6 日(水)
19 時 00 分～21 時 15 分
出席者：川上、齊藤、佐々木、森井、河合、
小森、菅、竹田、田中、豊田、西浦
佐々木徹（事務局）
欠席者（委任状あり）：池田、三枝、鈴木

●2021 年度第 7 回理事会議

招集形態：Zoom によるオンライン
開催日時：2022 年(令和 4 年)4 月 18 日(月)
19 時 00 分～21 時 00 分
出席者：川上、齊藤、佐々木、森井、池田、
河合、小森、三枝、菅、竹田、田中、豊田、
西浦、佐々木徹（事務局）
欠席者（委任状あり）：鈴木

●2021 年(令和 3 年)度第 8 回理事会議

招集形態：メールによるオンライン
開催日時：2022 年(令和 4 年)5 月 6 日(金)
19 時 00 分～21 時 45 分
出席者：川上、齊藤、佐々木、森井、池田、
河合、小森、三枝、菅、鈴木、竹田、
田中、豊田、西浦、佐々木徹（事務局）

●2022 年(令和 4 年)度第 1 回理事会議

招集形態：Zoom によるオンライン
開催日時：2022 年(令和 4 年)6 月 6 日(月)
19 時 00 分～21 時 10 分

出席者：川上、齊藤、佐々木、森井、池田、
河合、菅、鈴木、竹田、田中、豊田、
西浦、佐々木徹（事務局）
欠席者（委任状あり）：小森、三枝

●2022 年(令和 4 年)度第 2 回理事会議
招集形態：Zoom によるオンライン
開催日時：2022 年(令和 4 年)8 月 8 日(水)
19 時 00 分～21 時 00 分

出席者：川上、齊藤、佐々木、森井、池田、
河合、三枝、菅、鈴木、田中、竹田、豊田、
西浦、佐々木徹（事務局）
欠席者（委任状あり）：小森

●2022 年(令和 4 年)度第 3 回理事会議
招集形態：対面式（夏季研修会終了後）
開催日時：2022 年(令和 4 年)8 月 23 日(火)
15 時 30 分～17 時 10 分
出席者：川上、齊藤、佐々木、森井、池田、
鈴木、竹田、佐々木徹（事務局）
欠席者（委任状あり）：河合、小森、三枝、
菅、田中、豊田、西浦

編集後記

学会通信第 48 号をお届けします。本号は
2 年後に創立 60 年を迎える当学会の歴史を
振り返るべく、故米山文明元理事長と、故柴
田睦陸 2 代目理事長の記事をご紹介しまし
た。夏季研修会は全国的にコロナ感染者数
が増加していた中で、3 年ぶりの対面開催
が実現しました。ご参加を見送った方には、
近々オンライン配信を予定しておりますの
で、配信を希望される場合は 14 ページの
「◆夏季研修会の講座配信のお知らせ」を
ご覧の上、お申し込みください。ご都合が
つかず受講できなかった方をはじめ、再度受

講を希望される方も、どうぞ奮ってお申し
込みください。11 月には 3 年ぶり対面での
例会も予定されております。是非とも皆様
のご参加ご支援を賜りますようお願い申し
上げます。会員の皆様方の益々のご清祥と
ご発展を祈念申し上げますとともに、学会
の益々の発展に向けて皆様のご協力を賜り
ますよう何卒よろしくお願い申し上げます。

編集担当：齊藤 祐、森井 佳子

日本声楽発声学会

会 長 : 川上 勝功
副会長 : 佐々木 正利
副会長・事務局長 : 齊藤 祐
事務局次長 : 森井 佳子
(エグゼクティブ・アドバイザー): 竹田 数章
理事 (五十音順)
池田 京子 河合 孝夫 小森 輝彦
三枝 英人 菅 英三子 鈴木 慎一郎
田中 昌司 豊田 喜代美 西浦 美佐子

日本声楽発声学会事務局 佐々木 徹
e-mail: info@jars-voice.org
Tel/Fax: 03-6804-0626
〒154-0002 東京都世田谷区下馬 3-14-4
振替口座 : 00170-0-119920
日本声楽発声学会 HP
<http://www.jars-voice.org/>

学会通信第 48 号 2022 年 (令和 4 年) 10 月 26 日発行 発行者 : 日本声楽発声学会 編集者 : 齊藤 祐、森井 佳子
